

定型詩を使った日本語教育：四技能の向上を目指して

Pedagogical Use of the Fixed Form Verses in the JFL instruction

黒川直子 (Naoko Kurokawa)
Duke University
kurokawa@duke.edu

〔要旨〕

本稿は俳句や川柳、短歌などの定型詩を日本語教育に取り入れた試みの報告である。定型詩は句の鑑賞を通じて季節感や情感を味わったり日本語の韻律への意識を促したりと文化面および言語面双方においてメリットが多いが、本発表では書く技能や話す技能の向上も目標の一つに含めて行った中上級対象の活動の試みを紹介する。取り入れた活動は、愛媛県松山市で開催されている『俳句甲子園』の形式を参考にしたディベート形式の活動を始め、川柳を使ったゲームやブログを使った活動などである。学生のアンケート調査を元にその効果を考察し、ACTFLのナショナル・スタンダーズの観点からも日本語の定型詩を語学の授業に取り入れることの意義について考える。

1. はじめに

定型詩は音節や詩句の数、その配列の順序が一定している詩歌と定義されており、日本語の定型詩としては俳句や短歌、川柳などが知られている。特に俳句は世界最短の定型詩として日本のみならず海外でも愛好者が多く、アメリカではアメリカ俳句協会を始め各地に英語での俳句作りを行うグループが存在する。日本文学研究者のドナルド・キーン氏によると、俳句は日本文学の中で最も外国人に大きな影響を及ぼしたものであり、もはや日本だけのものでないと言えるほどである(星野、1991)。事実、Chaika (1998)等の実践報告が示すようにアメリカの小中学校の授業で英語の俳句作りをカリキュラムに取り入れている所も少なくない。当然日本語の学習者で俳句に興味を持っている者も少なからずいると考えられ、日本語教育においても教材として活用し得るものと思われる。本稿では、詩歌と外国語教育の関係について考察し、中上級の日本語のコースでの定型詩を取り入れた試みの報告及びその効果の検証を行いたい。

2. 詩歌と外国語教育

現在アメリカで行われている外国語教育は運用能力・コミュニケーション能力の向上を重視しているものが主流と思われるが、詩はその実践的ではない性質より外国語の授業の教材として使用することには消極的な意見もあるだろう。一方で、過去の研究で詩歌が外国語教育に果たす役割も多く指摘されている。Hanauer (2001)は外国語の授業に文芸作品を取り入れることの意義について、主に学生の動機付けや楽しみに有益であるという点、目標言語へのより強いかかわりを得るきっかけになるという点、それから、目標言語のコミュニティーの文化的知識を得るために有益であるという点を論じている。

Shulte (2004)は言語習得の観点より外国語教育における詩歌の果たす役割について様々な点を述べている。まず目標言語の音声やリズムの習得に役に立つと言う点である。そ

れから、情感豊かで意味のある文脈の中で語彙の習得が出来ると言う点、一つ一つの言葉の持つ力や微妙なニュアンスを味わう機会が得られるという点、また verbal fluency を促進するという点も挙げている。一方、Hadaway 他 (2002) の研究では詩はその短さ、簡潔さゆえに目標言語での文芸作品に親しんだことのない学習者にとっても心理的なハードルが低い状態で新しい概念を紹介することができる教材だとしている。

3. 定型詩と日本語教育

確かに簡潔さは俳句の大きな特徴の一つであり、七五調の歯切れよい音数律は日常生活の中で標語や広告などでも耳にする機会も多く、日本語話者にとっては耳慣れたリズムであろう。Minami & McCabe (1991) はあるトピックについて日本人とアメリカ人の子供達にそれぞれ話をさせてその発話の分析を行ったところ、日本の子供達はアメリカの子供達に比べ発話を簡潔にまとめる傾向があり、ある質問に対し3つの文で返答した割合が高かったため、その談話は俳句の特徴を備えていると論じている。Minami & McCabeによると、日本の子供たちは必ずしも皆正式に俳句を勉強するわけではないものの、七五調のリズムは日本の文化に埋め込まれており、かるた遊びや日々の談話からこのリズムを体得するものとし、七五調は発話の”discourse regulation device”として機能しているとしている。遠山(2001)は七五調の定型詩とモーラの関係进行分析することで、モーラによるリズム感は日本文化の深層にある基層文化に根ざしていると論じている。また金(2004)は俳句の七五調を韓国の伝統的な詩歌である時調の三・四または四・四の音韻と比較する一方で、その表現方法についても比較を行い、時調が自己の考えを読み込み感情を言葉で表現するのに対し、俳句はただ風景を読者に提示することで自己の想いを伝える傾向があるとし、それぞれの文化を反映していると指摘している。

これらは俳句を始めとする定型詩に関する研究のごく一部に過ぎないが、七五調の定型詩が音声面、文化面ともに日本語の特徴をよく現したジャンルであることを示す一例と言えるだろう。よって、日本語の特徴であるリズムを体得する上でも、また純粋にその内容を楽しみ背景にある文化についての興味を深める上でも、日本語教育に俳句を始めとした定型詩が有益である理由は挙げればつきないだろう。

事実、定型詩は既に日本語教育の現場で色々な形で取り込まれていることと思われる。アメリカで広く使われているジャパントイムス社の『中級の日本語』（三浦・マグローイン）には芭蕉や一茶を始めとした俳句が載せられているし、教師が選んだ句を使って授業を行う場合もあるだろう。一般的な使い方としては授業内でそれらの句を鑑賞し、または学生に実際に句を作らせたりすることが考えられるが、更にその作品をウェブで公開したり、コンテストを開催したり投票を募ったりしている先生方もおられるようである。俳句以外のジャンルでも、サラリーマン川柳などはユーモアに富み、かつ世相を反映した内容が多く文化を知る上でも優れた教材と言えよう。短歌であれば俵万智を始めとした口語短歌は親しみやすく、恋愛をテーマにしたものも多いため学生の共感も得やすいかもしれない。ちなみに筆者が以前教えていたミドルベリー大学夏学校の四年目のコースでは、学生と教師がそれぞれ作った短歌を詠み質疑応答を行う「歌会」を開催していた。

現在筆者の教えているデューク大学の三年目の日本語の授業では、毎年学生に俳句と川柳を作らせている。学生が作った句を読むことで創造力や表現力の豊かさ、また単語の

使いこなす巧みさなど、他の活動では表れにくい能力に気づかされることも多く、教師としても大変興味深いものである。俳句や川柳作りに強い興味を示す学生も多く、定型詩を鑑賞し自分で作ってみるといっただけでも学習者の動機付けや楽しみという観点では確かに一定の効果があると思われる。一方、語学の授業で扱うからには言語運用能力の向上という観点で、特に話す技能や書く技能の向上も視野に加えてもう少し発展させることができないものかと考え、いくつか定型詩を使った活動の実践を試みた。本稿では、デューク大学の三年目の授業及び国際基督教大学のサマーコースの中上級の授業で行った俳句と川柳を取り入れた授業を報告したい。どちらも学生のレベルは ACTFL の Intermediate High から Advance Low 程度が多く、詳しい叙述ができるようになることをゴールの一つとして普段から色々な活動を行っているが、この俳句と川柳の授業もその一環として行ったものである。

4. 活動報告

4-1. 川柳ゲーム

まず、授業で俳句、川柳、短歌を鑑賞しそのルールについて簡単に説明した後、「川柳ゲーム」を行った。これは以前放映されていた NHK のクイズ番組『あなたも挑戦！ことばゲーム』の形式を参考にしたものである。ゲームの進行は、まず学生を四人のグループに分け、そのうち一人が解答役となる。三人のメンバーは教師に見せられた言葉をお互いに相談せずに一人が五、一人が七、一人が五を読んで、三人で一つの川柳を完成させる。解答役は川柳を読んで、出題された言葉が何であるか推測し、正しく当てることができたら勝ち、というゲームである。以下は、そのような手順で授業内で作られた川柳の例である。

- (1) お湯入れて 味噌味つけて つるつるや
- (2) 友達と 歩いて話す みんなある
- (3) 人前で 下手に歌って 有名な歌

(1) はラーメン、(2) は携帯電話、(3) はカラオケを川柳で表現したものである。非常に単純なゲームではあるが、七五調の拍のリズムをつかむにはそれなりの効果があるものと思われる。例えば、(3) の「有名な歌」というのは七拍の字余りとなってしまっているが、これは「ゆうめい」の長音の二拍分を数えていなかったことが原因と思われる。このように学生が実際に作ったものを例に、長音や撥音はそれぞれ一拍と数えることや、拗音は例えば「きゃ」で一拍と数えることなどを説明する。ゲーム形式の活動のもたらす学習効果については様々な研究で指摘されている通りだが、この場合も単にルールを説明するだけではなく実際に体や頭を使って共同作業で川柳を作ってみることで、拍の感覚がより体得しやすくなると考えられる。余談であるがこのゲームは学生には大変好評で、2006 年度の国際基督教大学のサマーコース終了時には学生自らこのゲームを使ったクイズショーを企画し、全受講生の前でパフォーマンスを行ったほどであった。

4-2. 俳句甲子園

次に行った活動は「俳句甲子園」である。俳句甲子園とは毎年愛媛県の松山市で行われている高校生による俳句コンテストで、ディベート形式でお互いの俳句を批評し合って勝敗を競うものである。以下は俳句甲子園のルールである。

5人1組の高校生チームを編成し、団体戦で争われる。各チーム1人ずつ句を発表したのち、あらかじめ定められた時間内に句の鑑賞についてチーム同士で議論を戦わせて、3名または7名の審査員の多数決で勝者が決まる。2本または3本先取で、チーム勝利となる（Wikipedia『俳句甲子園』）。

日本語の授業でもこの形式を参考にして、以下の手順でディベートを行った。まず前作業として一人二、三句の俳句・川柳を作らせておく。授業では学生をチームに分けて、チーム内で自分の作った俳句について、どのような背景で詠んだ句か、どんな気持ちが込められているかなどを説明させる。その後ディベートで使う俳句をチームの中から一つ選び、チーム内で相手の句を分析し、その問題点について話し合い戦略を練る。

試合は一句につき五分間で、一回ずつ勝敗を決め、審査は討論を聞いている学生が行う。判定は句の良し悪しではなく、自分のチームの句のよさがうまく説明できていたか、相手の言ったことにうまく反論できていたか等がポイントとなる。但し、議論の判定をすること自体はこの活動の目的でないので、特に細かいループリックなどの設定はせず、印象での判断でもよしとする。

先日デューク大学の授業でこの活動を行った際は活発な議論が行われた。例えば、「月」という言葉を使い夏の夜を詠んだ俳句に対しては、月は秋の季語とされるため季節が分かりにくいという点が指摘された。また、「きれい」という形容詞が入っていた句については、美しさは名詞や動詞で表現するべきで形容詞を使うべきではないという指摘があり、その是非についても議論が行われた。

4-3. ブログ

このような形で議論を行った後、その発展として書く作業を取り入れた活動を行った。筆者の教えているデューク大学の三年目の授業では定期的にブログを使用しお互いの作文などを読んでコメントを交換する活動を行っているが、その一環としてクラスメートの俳句と川柳の中からそれぞれ三句好きなものを選んで感想を書くという課題を与えた。



図1：ブログ画面（Blackboard使用）

以下、学生がブログに書いたコメントを引用する。この活動では特に教師による訂正は行っていないので、エラーも含め原文のままである。

学生A

1. 私は徹夜の川柳がよく分かって、思っていたのは「あっ！やはり大学生の現実ですね」と言う事です。でも、徹夜で宿題をしすぎたら、すぐ病気になるのではないのでしょうか。。。体を大切にしてくださいね。。。
2. 「黒い物」のは私が料理のし方を習ったばかりの時を思い出しました。例えば、クッキーを作ろうと思っていたのですが、せっかくパン生地を作ったのに、オーブンの温度を高くしすぎて、全部が焼いてしまったのです。それに、オープンの中に作っている物はすごく忘れやすいですね。
3. 面白い川柳だと思います。でも、カービーさんと私との違いはカービーさんが風が友達だと思うそうですが、私は本当に風が大嫌いと言う事です。風によく髪をめちゃくちゃにされて、あまり何も見られないので、風のせいでいつも困っています。でも、私が「あっ！確かに！」と思ったのは「いつもある」と言う部分でした。

学生 B

1. 「風静か」と「花咲いている」のイメージはけっこう寂しいと思いますが、最後の「遊びたい」がその寂しさを急に解けて、びっくりしました！でも、何故か分からないけれど、「花が咲く」や「花が散る」という言葉がとても魅力的だと思いますよ。
2. 僕は冬、特に雪、の景色が好きなので、この俳句が好きです。それで、俳句三つの部分も普通の文のようにちゃんと繋いでいるから、読みやすかった！
3. この俳句は景色を描くより、ちょっと物語に似ているかもしれないね。最後の「美しい」はシーンにはいつている人物の考えだと思います。面白そうですね！

学生 C

1. この感じがよくわかります。本や論文を読む間に、シーンの静夜から突然電車のうるさい音が聞こえるようになるのはやはり邪魔でも脳を少し起こさせるんですね。その実、ちょうど聞こえているんです。
2. 氷から葉と書いたのはすごく強いイメージがするんですね。特に最後の「青い日」とあわせたら、氷が溶け始める時に葉が見えるようになるころのイメージがするから、季節がよく感じられます。
3. 「終えぬ」の代わりに「終わらぬ」と書いて、面白いと思います。終わるは両方他動詞と自動詞の意味があるから、他動詞の読み方だったら自分が宿題を終わるのをコントロールが出来ない感じがします。（宿題が終わらない vs. 宿題を終えない・終わらない）やはり宿題が絶えずあるから、早めにし終わることにしても、終えられなくて宿題が終わらない気持ちがよく知っています。

学生 A は詠み手の視点を自分の経験と比較し照らし合わせることにより、自分と異なる点や共感できる点について感想を述べている。学生 B は俳句の構成についても分析を行い、言葉の使い方の効果や句と句の繋がりについても言及している。学生 C も詠み手の視点を分析している点は同様だが、特に 3. では「終わる」という動詞の **Transitivity** についてこの学生なりのメタ言語的分析を試みている。このように、それぞれの学生が詠み手の視点に共感を表し、自分なりにその表現方法や効果について分析し、比較的抽象的な概念についても感想を述べていることが見て取れると思う。

5. 考察

上記の通り定型詩を使った活動の試みを行ってきたが、これらの活動の意義について学生のアンケート調査の結果を踏まえて考察を行いたい。

まず学生の反応だが、俳句・川柳に関連したこれらの活動は概ね好評であった。学期末に行ったアンケート調査で学生の書いた感想は主に「とても楽しかった」「日本の文化をもっと分かった気になった」「面白くてユニークな活動だった」「もっとしてほしい」などであった。また、“Good for defending abstract ideas and creative production” というコメントもあった。

このようにほぼ全ての学生が前向きの評価をしており、大半の学生にとって定型詩を使った活動は興味を持てるものだったと考えてよいだろう。過去の研究で指摘されている通り、外国語教育に詩歌を取り込むことによる動機付けや楽しみ、また目標言語の文化への理解を深めるという効果は確かにあると言えよう。

また、抽象的なアイデアを表現するのに役に立ったというコメントがあったが、Hanauer (2001) は詩を使ったタスクの効果として、主に“*Involving high levels of consideration, analysis, and elaboration of textual meaning*” と、“*Offering advanced language learners the possibility of extending their understanding of the potential uses and meanings of an existing linguistic structure*” の二点を挙げている。確かに俳句甲子園で相手の句を深く詠みこんだ上で討論したり、ブログで相手の視点に共感を示しつつ自分の考えを述べたりすることは高いレベルの分析力や表現力が要求される。Danesi (1992) は外国語の教室活動やディスコースにおいてメタファー的な概念が無視されてきたことを指摘しているが、メタファーを含めこのように多少抽象的な概念や日常生活とは少し異なった観点からコミュニケーションをする機会を与えることは、上級へ向かう学習者への課題として適しているものと思われる。

最後にこれらの活動を ACTFL のナショナル・スタンダーズ・5C の観点からも考察を行いたい。

(1) **Communication** : 俳句甲子園での自分の俳句についての説明や討論の進め方についての意見交換を行うことが *interpersonal*、相手の俳句についての分析を行うことが *interpretive*、さらに適切な態度での討論を行うことが *presentational* のモードに当たるであろう。ブログで相手の句の分析を行い、詠み手やクラスメートに向けて感想を表現する活動についても同様に三つのモードを満たしていると言えるだろう。

(2) **Culture** : この活動の場合は俳句や川柳自体が日本の文化的所産 (*product*) と考えられるが、それらを鑑賞し、自分で作ってみたり句について討論したりすることにより体験 (*practice*) するということになるだろう。また、詩歌の詠まれた背景にある生活習慣や思考などについて考察すること (*perspective*) も文化の学習の一つだろう。

(3) **Connections** : *Connection* は他の教科との連携であり、この活動の場合 *Communication* や *Culture* ほど到達し得ることは明確ではないが、俳句や川柳というジャンルについての理解を深めることで母語での俳句作りなどを含め、他の定型詩や文芸への興味を深めてもらえればと思う。

(4) **Comparisons** : **Comparison** については日本の定型詩の特徴と自国の詩の特徴を比較し、その表現方法について考察することなどが考えられる。また、他者の詠んだ句の視点を分析し、自分のそれとの比較を行うことも **Comparison** に含まれるであろう。

(5) **Communities** : 自分の作品をウェブやブログで学校外に発信することで、教室活動を超えた交流が可能になるだろう。また、生涯教育の一環として授業外でも俳句の鑑賞や、自ら句を作ることを楽しんだりしてもらえれば幸いである。

このように、俳句や川柳はスタンダードズのゴールの多くを達成するための要素を備えており、文化の C はもちろんのこと、コミュニケーションの C を達成するにも非常に適した教材だと言えるのではないかと思う。

6. 終わりに

以上の通り俳句や川柳は文化理解も含めた五つの技能の向上を促進することができる教材であることを論じてきたが、筆者の行ったこれらの活動は授業時間を二、三回使っただけに過ぎず、全体のカリキュラムに占める割合は小さなものであることを付け加えておきたい。よってこの活動を行ったことによって言語能力が飛躍的に向上するといった性質のものではないが、むしろ日頃の学習の成果を普段とは違ったトピックで表現する機会を与えることに意義があるのではないかと考える。語学の授業に文化的な要素を取り入れる方法や教室活動にバラエティーを加える方法については日本語教育に携わる先生方は日々工夫を重ねておられることであろうが、定型詩を使ったこのような半ば息抜きとしての授業も五技能の向上を促進するための試みの一つとしてご参考になれば幸いである。

参考文献

Danasi, Marcel. “Metaphorical Competence in Second Language Acquisition and Second Language Teaching: The neglected dimension”, Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics, 1992, pp 489-500

Hadaway, N.L., Vardell, S.M. & Young, T.A. “Poetry for language development of English language learners”, The Dragon Lode Vol. 20, 2002, pp.68-76

Hanauer, D.I. “The Task of Poetry Reading and Second Language Learning”, Applied Linguistics 22/3, 2001, 295-323

星野恒彦「世界の英語ハイク」『アキューム』第3号、2001、
http://www.education-world.com/a_curr/curr052.shtml

金貞禮「定型詩歌に見る韓日文化の比較研究への試み」『韓国日本語文学会 第二十回学術発表大会論文集』、2004, pp 201-203

国際交流基金日本語国際センター、National Standards in Foreign Language Education Project. Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century. 「日本語学習スタンダードズ」, 1999
http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-2USA.pdf

Minami, M. & McCabe A. “Haiku as a discourse regulation device: A stanza analysis of Japanese children’s personal narratives”, Language in Society 20, 1991, pp 577-599

三浦昭・マグローイン直美『中級の日本語』The Japan Times, 東京、1994

Shulte, C.G. “Mining for Gold: Poetry Writing in the Secondary ESL Classroom”, MELTA, 2004, <http://www.melta.org.my/ET/2004/2004-30.pdf>

遠山淳「日本語定型詩のリズムー五音と七音をめぐってー」国際文化論集第21号、2000、127-140